

2020年

ホームページへGo!→
スマホで教室だよりが見られます



教室だより 2月号

公文式本市場教室 火3~7時 木 2:30~6:30 TEL 61-4936(上平方)

横割教室 月・水 3~7時 TEL 61-8891(福島方)

指導者: 新妻ゆき子 携帯090-2260-0671

Eメール:yvonne-yukiko@mbi.nifty.com

携帯アドレス:yvonne-1682-yukiko@docomo.ne.jp

ゆきこくもん

検索

ホームページ <http://www.yukiko-kumon.com>

【公文式は「働く姿勢」に通じる力を育てる】全5回の⑤

公文式が育む力について、シリーズでお伝えしてまいりました。今回は最終回です。公文式が日頃の学習で、自分の力で学ぶ「自学自習」を大切にするのは、子どもたちが社会へ出てからのことを考えるからです。社会に出てからも、一つひとつ、人から教えてもらわないとできない、ということでは困りますし、そういつも教えてもらえるものでもありません。やがて、子どもたちが家庭や学校から巣立ち、「自立」していかなければならないと考えた時に、日頃の公文式学習が、こうして将来必要とされる「働く姿勢」につながるの、とても心強いことでもあります。

このように、学習を通じて子どもたちが、自らの力に磨きをかけられるよう、教室でも「自学自習ができるようになること」に向けて、一人ひとりに合わせた指導を追求してまいりたいと思います。ぜひご家庭におかれましても、ご理解・ご協力をあらためてお願い申し上げます。

今回シリーズでお伝えした内容は、入会時にお渡しした『KUMONガイドブック』より引用した内容をベースにしたものです。『KUMONガイドブック』や公文教育研究会のホームページには、公文式についてわかりやすく解説しています。お時間のある時に、ぜひご覧ください。

公文式の創始者・公文 公（くもん とおる）先生の言葉より

“目指すは高校の学習内容”

公文式教育が目指している目標は「自学自習で高校教材」を学習できる子どもの育成です。

小学生の時はできていたのに、中学、高校と進むにつれて授業についていけなくなる子どもがいかにも多いことか……。その原因のほとんどは、各教科の根幹となる基礎学力（読み、書き、計算の力）の不足です。余裕のある中学、高校生活を送るために、家庭教育においては小学生、あるいは幼児のうちから、すべての勉強の土台となる内容にしぼって、高校入学までに効率よく学習を進めておく必要があるのです。

だからこそ公文式は、算数・数学、国語、英語とも、高校で学習する内容に合わせて教材がつくられています。その内容に直結しないものは思いきって削り、学校で教わる何もかもは盛り込んでいません。算数・数学は、高校数学にどうしても必要な高いレベルの「計算力」、国語、英語は、高校以上で必要とされる「読解力」にしぼり込んで、効率よく進んでいけるようになっています。この十分な基礎学力を土台として子どもたちが明日を拓いていってほしいと思います。

2020年 2月の学習日

Sun	Mon	Tue	Wed	Thu	Fri	Sat
日	月	火	水	木	金	土
						1
2	△3	4	△5	6	7	8
9	△10	11	△12	13	14	15
16	△17	18	△19	20	21	22
23	24	25	△26	27	28	29

本市場教室日□

横割教室日△

保護者様へお願い。

お休みのときは電話でもメールでも結構ですので連絡をお願いします。

1月分の会費引き落としは1月28日（火）です。よろしくお願いたします。

(注)休会・退会の場合は、引き落としの関係から15日までに申し出下さい。

教室からご家庭に連絡される生徒さんの場合は固定電話・指導者携帯電話・メール等はいずれも10円納入願います。

*学習終了後、学校の宿題をやってもかまいませんが、おしゃべりしたり、だらだらやる子は、即退出してもらいます。ご了承ください。

注; 2月11日（火）祝日の為 公文はお休みです
2月24日（月）祝日の為 公文はお休みです

*ゆき子の一言コラム

大学の入試改革の一環であった英語の民間検定試験の導入が延期。

萩生田光一文部科学相の失言が引き金になり、

この制度の不備や問題点が明らかになったためです。皮肉なことに大臣の発言が、けがの功名となりました。この「改革」が「改悪」であることは言うまでもありません。異なった複数試験の比較の困難さもありません。また民間試験は、それぞれ特有の「傾向」をもっており、ときには条件反射的な瞬発力を要するものもあります。それと真の英語の表現力や、社会的コミュニケーション能力とは少ほとんど関係がありません。

また、大臣がはからずも述べたように、この制度は、子供の頃から英語塾などで英語に親しむ家庭や地域にいた子供と、そうでない子供の間で格差を生み出してゆきます。かくて、あまりに多くの問題点が次々浮かび上がるので、さすがに民間試験導入を支持する声はほとんど聞かれませんでした。確かにこの制度は一時延期というより廃止すべきですが。

限界への負荷

批判の多くは、進め方が拙速であるとか、実施上の不備が残る、といった技術的な点をめぐってなされています。

「英語を重視し英会話の力を高めることは必要だけど、入試の平等性の観点から技術的に問題がある」というわけです。しかし、この背後にはもっと重要な問題があります。もう長らく、政府は学校教育における英語重視、特に英会話力重視の方針を打ち出してきました。どうしてでしょうか。グローバルな経済競争のなかで、国際的なビジネスの現場で英語が不可欠になっているからです。英語力は日本の経済的競争力を高め、経済成長を可能とする基盤能力だといわれます。学術研究においても、日本の学術水準が低いのは、海外の一流雑誌に投稿し、また研究交流する上で不可欠な英語によるコミュニケーション能力に劣るからだ、というわけです。要するに、英語がしゃべれないと日本は二流国になる、というのです。

もう数年前のことになりますが、大学院のある留学生が私のところへやってきてこんなことを言いました。

どうして日本では英語、英語と騒いでいるのですか。他の多くの国は、多民族だったり、歴史的に西洋の植民地だったり、海外へ出稼ぎにいかねばならないから仕方なく英語をしゃべっているのでしょうか。

日本はそんなことをする必要はないでしょう。国内でほぼ日本語が通じるのに、どうしてそのメリットを生かさないのでか」と。その時、私は即答に窮しました。その通りでした。学校教育の現場にまだ余裕があって、従来の教科の上にさらに英会話を積み増すことができればまだしも、今日、学校教育は、生徒も先生もほとんど限界状態に置かれています。英語重視の負荷が、いっそう学校をすさんだものとする可能性は極めて高いでしょう。

言葉は文化

そもそも日本語能力だけでなく、コミュニケーション能力全般が低下し、世界についての知識・関心も低下しているこの文化状況の中であって、英会話力の取得よりも先にやらなければならないことはいくらかもあるでしょう。もちろん英語がしゃべれるにこしたことはないでしょう。しかし、決定的に重要なことは英語力そのものではなく、何を話すか、どのように話すかです。

英語力よりも会話力であり、会話を支えるものは話題であり、ユーモアのセンスであり、相手の真意を理解する力であり、場面を読む能力です。それを生み出すのは、まずは母国語による表現力の問題なのです。端的に言えば、言葉は文化です。

たとえば、令和になって脚光を浴びた万葉の言葉は、日本人の感受性や自然観と深く結びついています。

そして英語にはまた英語圏の文化が背後にあります。

本当に表現したい内容もないのにいくら流ちょうな英語だけしゃべっても無意味です。

大事なものは、表現し伝える内容なのです。

にもかかわらず、「英語がしゃべれば、いい仕事につける」などというさして根拠もない幻想は、かえって「英語帝国主義」の片棒を担ぐだけのことでしょう。

*** 2月無料体験学習 受付中！ 2月13日（木）～2月27日（木）**

①はきものはきちんとそろえよう！

②あいさつは おおきなこえで はっきりしよう！

③もちものには なまえ をかきましょう！

④でんわをかりたら かならず でんわ代10えんいれてください！